

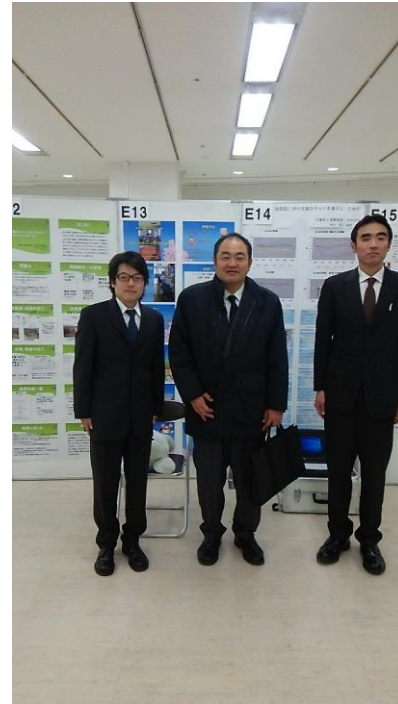
セラピーロボットパロの介入効果について

2016年7月20日

介護老人保健施設かみかわ リハビリテーション課

坂田寿史（理学療法士）

松井友希（作業療法士）



〈はじめに〉

この度当法人老健かみかわに於いて認知面の低下及び不穏状態の症状がみられる利用者において症状の改善を目的とした研究テーマを実施する運びとなった。使用する機材はセラピーロボット「パロ」を使用する。当施設に於いてもパロ使用によって、認知症高齢者に対する効果を検証するとともに集団リハビリを通して利用者の健やかな生活支援を行っていきます。

またこの度はパロを導入するにあたり評価項目を設定し利用者様の心理面及び行動変化を継続的に観察、評価する。

〈課題〉

課題としまして①利用者様の笑顔が少ない②不穏状態の利用者様が増えている③利用者様の覚醒度の低下以上の3つとなりました。

〈パロとは何者？〉

近年デンマークでは約 400 体輸出されており海外では比較的普及している。主にうつ症状や精神疾患を有する者に対して 50%改善を示し心理的、社会的、生理的効果の改善も報告されている。また他にパロは聴覚、平行覚、触覚を有し、発声もし、性格も触れ合いの中で変化するという特性を持っています。

〈目標〉

目標と致しましては 1 つ目に利用者様の笑顔を作り出すこと 2 つめに利用者様の覚醒度を高める事 3 つめに利用者様の不穏回数を減らしていくこと 4 つめに利用者様の認知面の向上としました。

〈目的〉

認知症高齢者に対してパロを使用する事によって生活上生じていた問題行動及び不穏状態の改善を図り、利用者一人ひとりの QOL 向上に寄与させて頂く。更に老健施設での諸活動に対する意欲の創出を促す。

〈実施方法〉

OT、PT 各 1 人ずつが指導役となり利用者 4 名をリハビリ室に集め半円を描くように車椅子をセットする。始めは物を使わずに利用者様と季節の会話等を楽しみます。その後パロを手渡し、しばし触れ合いの時間を設けます。次に棒体操やゴムボールを用いたレクリエーションを行います。最後に上下肢の運動を行い終了となります。

〈期間〉

H28 年 7 月 27 日～8 月 26 日 週に 1 回/20 分程度

〈ケース対象者〉

認知症高齢者（HDS-R5 点以下であり不穏見られる）4 名。日常生活では車椅子上で生活されており、ADL は全介助レベル。問題行動としてはテーブルを叩く、ゆする、大声を上げるなどしばしば不穏症状が見られる。各 4 名の特徴としては簡単なコミュニケーションによる反応は見られる利用者を抽出した。

〈評価方法〉

利用者 4 名に対して集団レクリエーション及びパロを介在させることにより生活の様子の継時的な変化についてまとめる。

- ①利用者様の笑顔の様子（回数）
- ②日常生活上の覚醒度の変化
- ③生活上の変化（不穏 暴力 大声）

④認知症評価（長谷川式）

〈結果①〉

〈リハビリ時に笑顔の見られた回数の推移〉

初期評価時は一人であったが最終評価時には全員に笑顔が見られるようになった

〈結果②〉

・利用者様の笑顔の様子

→笑顔が増加

→パロを見て笑顔がこぼれるようになった

・リハビリへの取り組みの変化

→リハビリ参加時に覚醒度向上した

→活動初期と比較して動作が大きくなった（動きが増えた）

・生活上の変化

→不穏回数が減少した

→感情の波が少なくなった

〈結果③〉

認知症評価を実施し4名中3名に数値の向上が見られました。その内2名は0点から3点、6点と著明な向上が見られました。

〈疑問点〉

ここまでパロを使用する事で様々な症状の改善に役立つことは評価できたが同じような熊のぬいぐるみでも実は効果が出るのではないかと疑問が浮かびました。実際に毎週熊のぬいぐるみを使用した集団リハビリはできませんでしたが、個人的に不穏が見られた時や時間がある時に熊のぬいぐるみを手渡してみました。その結果は確かに熊のぬいぐるみもパロと同様に可愛がっている方、不穏が収まる方も見られました。しかしパロの方が自ら動いて働きかけるためにより受け入れがスムーズに見られました。

〈まとめ〉

- ・週に1回でもパロを使用した集団リハビリテーションの効果は見られた
- ・通常のぬいぐるみでも一定の効果は見られるがパロを使用した方がより効果的である
- ・個別リハビリを行う時と比較して本人のモチベーションアップに貢献できる
- ・利用者様の精神面が改善し、笑顔も増えた